別記様式第３号

学　位　論　文　要　旨

氏　名　　大西　洋史

題　目　図画工作科の授業における教師のパフォーマンスについて

本研究の目的は，図画工作科の授業における「教師のパフォーマンス」について以下の３点を，調査研究と授業分析を通して明らかにすることである。

第１に，「教師のパフォーマンス」の捉え方を先行研究や調査を通して明確化する。

第２に，授業分析より図画工作科の授業で有効な「教師のパフォーマンス」を明らかにし，「教師のパフォーマンス」の具体的な構造や特性の明確化を図る。

第３に，授業分析から「教師のパフォーマンス」の傾向や水準を分析する研究方法を確立し，それを用いて「教師のパフォーマンス」の向上をサポートするための自己省察システムの考案とその効果の検証を行う。

まず第１に関しては，図画工作科での「教師のパフォーマンス」のイメージと構成要素について序章と第１章において考察した。

序論では，「教師のパフォーマンス」という用語について整理するとともに，国内におけるパフォーマンスの研究について「パフォーマンスの構成要素」を示した佐藤綾子の研究や，言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションについて述べた上條の研究を取り上げた。

また，マーク・L・ナップの非言語伝達に関する研究の下位分類やレイ・L・バードウィステルの対人コミュニケーションに関する研究，マジョリー・F・バーガスの非言語メディアの分類など海外で行われているノンバーバルに関する研究について，国内での研究との関連も含めてまとめた。さらに，教師の発話の構造や特性の研究として山下や大泉の論を取り上げ，本論との違いを確認した。

第１章では，図画工作の授業で「教師のパフォーマンス」に対して小学校に勤務する教員がもつイメージについてのアンケート調査や小学校の児童に対して５件法による教師イメージの意識調査を実施し，得られた回答を「テキストマイニング」という統計手法を用いて視覚的に示した。それらを基に「教師のパフォーマンス」が，例えば図画工作科では実演（材料，用具，技法）や作例の提示（児童の作例，教師の作例，完成のイメージ）と捉えられていると考察した。

そして，序論での先行研究や第１章での分析結果を基に、「教師のパフォーマンス」の構成要素として次の８項目にまとめた。

①言葉の使い方（わざ言語などの特徴的な言い回しを含める）

②周辺言語（声の大きさ，高低，話す速さなど，音声に関るものすべて）

③表情

④身振り

⑤間（タイミング）

⑥間（空間）

⑦示範（技法・技術）

⑧示範（材料・用具）

次に第２については，自己省察に役立つシステムを開発するために授業分析を実施し，その具体を第２章，第３章，第４章で考察した。

第２章では，経験年数の異なる図画工作科専科教員が行った授業の導入場面を取り上げ，評価シートやレーダーチャートを用いて視覚化したものを基にパフォーマンスの構成要素の使われ方の違いや学習効果について比較した。そして，素材である和紙の示し方での「教師のパフォーマンス」の違いが，その後の児童の活動に影響を与えていることを確認した。

第３章では，２人の学級担任が行った図画工作科と他教科の授業を記録し，「教師のパフォーマンス」の構成要素８項目を用いて教科間・教師間での比較分析を行った。図画工作科と国語科の授業を記録した実践Ａと図画工作科と算数科の授業を記録した実践Ｂで，授業の「導入」「展開」「まとめ」の各場面における「教師のパフォーマンス」の特性を評価シートやレーダーチャートを活用して比較した。国語科と算数科に比べると図画工作科では，用いられるパフォーマンスの種類や量が導入部分に偏っていることや示範を中心に周辺言語や身振りが効果的に使われていることなどを確認した。また，評価シートやレーダーチャートを活用した授業評価の方法が，教師の自己省察を促す可能性を示した。

第４章では，第３章で取り上げた実践Ａ，Ｂの授業で優れたパフォーマンスと思われる場面を「トランスクリプト」を用いて記述分析し，「教師のパフォーマンス」の有効性を確認した。それに合わせて授業者に対しての聞き取りを行い，授業省察を行うにあたっての前述の分析方法の有効性を検証した。

第３の目的については，第５章でこれまでの授業分析の成果を生かして検証した。

調査を行った年に採用された初任教員Ｃの４月から７月までの計４回にわたる図画工作科の授業でパフォーマンスを窓口に評価し，その内１回は，他２名の教員が行った同一題材の授業とＣの授業との違いについて比較考察を行った。分析Ⅰでは，初任教員Ｃと他２名の教員Ｄ，Ｅが実施した授業で「教師のパフォーマンス」の評価を時系列に沿って比較グラフに表した。そして，「導入」「展開」「まとめ」でのＣとＤ，Ｅとの評価の違いを捉えるとともに，授業記録からパフォーマンスの構成要素の使われ方の違いを確認した。分析Ⅱでは，分析Ⅰで取り上げた授業の導入場面で，授業者Ｃ，Ｄ，Ｅが大きさを指示して描かせる際のパフォーマンスの構成要素の使われ方を比較した。そして，教師の意図通りに仕上がった作品の割合を授業毎にグラフ化してパフォーマンスの違いが与えた影響を確認した。分析Ⅲでは，初任者Ｃが実施した４回の授業での評価シートの結果をレーダーチャートやパフォーマンススコアの比較グラフで視覚化し，構成要素の使われ方の変化を捉えることで初任教員Ｃの成長を確認した。分析Ⅳでは，初任者Ｃの１回目と４回目の授業の導入場面での 「トランスクリプト」の記述分析を用いて比較し，４回目では「教師のパフォーマンス」の構成要素が多く使われるようになったことを確認した。

これらの分析を通して，初任教員Ｃのパフォーマンスの向上を明確に示すことで評価システムの効果が確認できた。

今後の課題としては以下の３点が挙げられる。

①今回作成した「評価システム」を教員研修に活用し，効果の検証を行うこと。

②調査対象を広げ，優れたパフォーマンスを可能とする要因を探り，それらを取り入れたパフォーマンスモデルを想定すること。続いてパフォーマンスモデルへの達成度合いを示す指標を定めること。

③上記モデルを基に，パフォーマンスの向上を図るためのトレーニングシステムをつくり教員研修への活用を検討すること。